WB 12
20
3

俳家全集

天明

911.308
M214h
準貴

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

WB 12
20

存義

春

馬場存義（エド）（天明二年（十月歿））

弘法のそにり一字や山ざくら

鳥帽子着て尻餅つくや小松曳

咲く花の臭鉢といへ春の雨

梅へ来て干鰯をねらふ鳥ホ

萬歳や十三文の足拍子

尼の守る神にめでたき柳ホ

佗声に蛙の中の田哩かな

初午や和銅の銭の赤に今

初午や昆布に山椒の袖みやげ

医なる義こそ
常を見て四拾有
あれまものそ

240634

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

鳥渡みつけ茸と
ゑばこ茸敬白

三月尽

初霞いくや藏王の奥の下
無いつめて三十日みより許りや梅の花
蝶々や片岸に出て花咲きそめ
初午や片岸に心ある梅の捻書
苗代や蝶八五月があたり月
早蕨や十日の雪
十の指
舞あるじやく雨の櫻ぶ
寺いよ〳〵多り行く
ぞうさの足
紙雛やこゝに女夫連
梨花一枝心ありけや閨の床
春の日に底なき藤の棚

夏

亀慶悼

涼しさや扇流れぬ宵もなし
小僧扇け夜を寝ぬ島そ時鳥
早少女や今日ハ向ふに小松原
五月雨や田毎の中に鳴く蛙
町内ハ歌をうたいず夏の月
葉隠れの五日の月や柏餅
和を入れて女使ひの
狂ひなり竹に雀も若いとし
天蓼に花見顔なる小猫ぶ
芥子散るや外の花も恥多し

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

頃の来て奥歯ゆあや時鳥
（緑なる 失のて）筍や千代といふ尚に盗れし
黒髪山画賛 青葉若葉葉急悲心深き御山かな
柵尾い植尾ゆかし 南士鳥
獨樂の團扇に蚊帳の戦きか
めしくも袂を振も蛍かな
蝙蝠や行水の湯を空へ打つ
五月雨昔井筒のありし跡
神專院清おとそ雨のはらわうや祇園町
多玉や遠目に馬もぬれ嵐
祇園ゆるふるまふ人もなくなるれば寒し 雛

秋

今朝秋と知らで扉をく男かな
御所柿やおのれが葉さへ落るのな
水無月のからきめを見てけさの秋
先ひとり我影青た月の友
摂待 萩薄同一茶碗や攝取不捨
貞佐尼忌 薄とも今ハ十七回忌や 石佛
初秋や蚊帳に煙草を一二服
七夕 今宵逢て稲もたらむか星の雨
朝顔やはのくら見ゆる人の息
稲妻やあぶなき歓のかけ處

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

白露や何処一こみても草の原
子を抱て行司まつや辻角力
犬を鹿猫を兎や今日の月
音よ鳴くや河鹿も水のありし秋
七夕　下書も縁の紙や梶の葉
文月の十七夜なり大文字
霧に日の暮るうらの峠うし
買ふ人を門徒とさすや梅ときく
白菊や露もこぼさぬ一てん盆の旅
送庭墓聖灵を留守と子一

冬

四布五布みのかるれがの蒲團かな
春とゐふ極楽ありり寒念佛
菰翁は何に隠れて師走かな
むらーぶし練書堂を舎りかな
冠者が傘さして七ぶらじ年の暮
氣に入りの調度ありうる鑑
前うしろあるお火桶の撫ぐら
落葉して気日に成ぬ後堂
遠かうめ雪を一重や月の色
梅柳餞あり春が今来てる

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

雜

世の中を紙子羽織や　妖の皮

驚かぬ炎の子　箕毋やねぐら鳥

持直す日和も寒し鴨のつや

艱提てゐ歩行す博さ小

口切や壁なりも手を引ぬ間み

逃げながらねぎとものぬる磯の浪

春　天文　地理

生涯
横井也有（天明三年六月十六日没）年二

今年の春の幕は何

まで春の幕は梅なのこ

山吹をうたふ

春の日ありなる日かな

雪月のつぐなふ

雪隠や小帆はし

従駕の上路や元て

子の歩をそろそろ

春鳥

雨鳥　雲雀より小さくて（也有）

陰居て巴水に終る　賞翫の花をりでの
賞有土へハうみ
賞の七つにしやふ立さぶ
くまゝしてん（也有）山の上
張飛の紅くでる　蒸ル
韓湯へハこうて
朝寝詩　賞を（有）にて
悼伯世　なき魂や昇有て雲に雀
雛一羽たつ畑打のくまあ（也有）

鯉の画ニ賛ヲ乞ハれて

紀ハさそふ鳥哉

山房の暁　笑事ニ
ものゝ一ツ春の
小鳥も舞つゝ
陰るや小松の
折ふすは雪の
川魚の跡へ
犬のあるきも
梅の香のまぎれ
鯉の画ニ賛ヲ乞ハれて
紀ハさそふ鳥哉

陳舎春舎　蕪村　依所すむ
居を移す人に　昔の次第にうる桜哉
俤待頃の閨に　昔よき年也せあるの麹匂
生娘の独たぶさ引て雛の夕
悼子孔文　魂許り牡丹一ひらのうきふし
子規

春

（也有）

贈全平庵主

蛇の中に動くものあり田螺取
青海苔に咲くや白魚の歩み小
子女のよごれ習わぬ田螺取
溜池や去年の落葉に鳴く蛙
四五株の水にもすんで蛙小
物の表屋根にありて蝸の下

春動物
（隆昌）

悼六々庵　蝶鳥もいさ涅槃会の時ついで
責る田にもなまくさへて田螺小
池を田に埋めそしもの蛙小
浮き沈むを帰雁と詠む　陸北（也有）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

春

梅

下枝の飛ひくく梅の花
梅の木や耳かくす迄梅の花
花おそ季のうき梅の又うき
こゝまでの下枝ながき梅の花
金柑もまじり咲けり梅の花
梅のもるもるや月の光の侘
耳赤のおもてさらすや梅のまり
見つけたる時のちまき事を（也有）
売捨てに来る和日北田螺取
書許りまねて遊ぶ子の帳情
姥山を射山と詠めし人に
同し山たゞ名をかへて呼る鳥
女の年をとりて帳を
追ふまたるゝに
姥山を射山と詠めし人に
同し山たゞ名をかへて呼る鳥

也有　書おはなかをさや痩たる梅の顔

春

梅
〃
〃

折る木の松かざこへ　梅の花（也有）
梅の花さくやそれぞの白へ折
梅やそれぞの香ちらす
梅さくやそれぞの香ちらす
梅ぞほすそれぞの香ちらす
一のもまき梅の花
梅ももの梅の色
流れ村さかまく梅の花
小ぶまでしこもの梅の花

春

櫻（花も）

今植ゑ一株や世の春乃雪
鉢栄をそり出して行く櫻哉
開帳の庭には一かる櫻哉
短尺に鳥おとさる櫻かな
はく人の折る人心櫻かな
頃は花そそくれ櫻かな
無筆にも繩張したる櫻哉
持て賜るこの雪や山櫻
開帳の日もやあけり初櫻
一本に加たまる人や遅櫻

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

祇薗ふ宮にさかりや　連櫻（也有）

まる風のにくみのこりや　連櫻

酒はむ徳りたく人あり　連櫻

永いを暮につくむや　櫻将

花（除櫻）

須磨硯記

する里やのくれ須磨の花曇

頭痛ふみ中水あぬ名や花曇

蝶ふつきたる食もつくや　花戻

散る花を踏むつゝの札もなし

こちの花咲て傳に　酔人ゝ

無掃除の日を来て見た寺の花

善悪の友もる花見戻りかな

布袋庵尽客の集序花のやうな音を残す島の跡

蝶や花ぬす人を付けて行く

両の手に花を酔人や　山戻り（也有）

春

断酒辭　花あらん花の留守せん下戸二人（也有）

飛鳥山　ちり残る茶屋ありあるじ花のもと

贈定花堂さく花や交て錦

子の年子の月子の日に生れたる女子を

花心何蜂に緑の姫小松町

木

（梅櫻隆）

上へまるでなき柳小

（以下判読困難）

の松も陽炎かな松

尼松もまたがねらん松

百木の洞うつぼや松

尼寺の朝な朝なを柳

減して土へつく柳

實のみたねすゞしき松

折ふしを今ぞ柳

帰るつばめをさそふ柳

也有

松なしくんなすゝき哉

笠塚庵
自画賛
似行年の春
あら何柳さそなかし
馬ぶみ仕舞ふ
武吉
梅やちる桃
櫓をこぐ
おもかげの柳
おもかげの柳
おもかげの柳

春

時候
暑用

春

人事

三月廿九日
伊勢守まで
まねかれ
まゐる

春の夜や籠よりこぼれ漏る灯

(廿有)

夏

時候

全篇挽歌

辞世　短冊や　うそと見すもなき
　　雑の見ぬ　山吹の枕い四月尓
　　綿入も　おもひ河の夏の旅
蔵馭　我もなるもなき　蓑の笠尓
　　口ずさみ　花のいとまを　雨尓
　　箱入娘　なまじ　仏に　なさで置
　　ま　稼者といわれも　蛙の　なら尓

短冊や　一郎　明の　暗
短冊や　桐年　嵩の　明け　残り

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

庵稲のゆれくひたるのあつまり（也有）

井戸堀の浮世へ出たる蛙かな

もの申のあたりにもの着る蚊かな

涼しさや蛇なたくる川向へ

盃石記

涼しさや江の島青嵐

河骨やみの月ものに至まで

六月廿日ごろ鶴岡を愛で

初暉の直に来たる蚊かな

夏

人事

（器用さ）

贈公平庵文

俳先生の手向にそ軒端の藤なるを

江戸にて　着かへても又同じ名や　旅衣

江にまて　荷のそくく其日やる田植かな

我門へ尻の近よる田植かな

小便に隙所の田へ出て早苗取

絲の中に動くものあり早苗取

庭りんに棒に風なし真菰賣

灌佛もやそこそこ藤の花

出千の雛に桃の花りかれ

歎賣も人なたさるを祭りかな（也有）

也有

草刈の手に殘りけり笹笛（一也有）

糞ぞうが来て風よこせの涼み

むかしく祖父も川へと涼み

深川墨亭　初雪の富士を提灯端み涼み

そらかうに座頭をおして涼みかな

帷子の背中をおして涼みかな

追いのけて犬の場を取る涼みかな

禁酒の人に神もうけよ酒過さずとせば

夏

羇用

菴記

蚊帳釣りて牡丹あり草の庵

桜咲く中や書斎の草枕

芳野をも見すに今年も松かな

秋窓の牡丹へ矣る大工かな

雪隠に去年ながらの團扇かな

唯光をあらためかする蚊遣かな

李良團賀

祷着る日のまる酒のれ

悼八竈

蚊遣にも泣てくれる野の煙れ

年もを一つ寝てくれる扇かな

萬水一葉もきらりなり（一也有）

半部庵帰途の作

福禄寿

其百毎の長を誇ず七なま嶺に一枝虻庵引

やうて見ん機もを一 (世有)

くいおす一抱をの時分

改まで風ぬをかあ風分

妊庵引

天文

地理

寝覚里ちる物ハなくて筏よ青嵐

謝無馳走辞魚賣の辞すそに吹け青嵐

盃山涼風や自由に山の置き所

五月雨や人白くを見せなのら

五月雨や背戸に鯉の捨小舟

贈焼香師 梅雨晴や世をうの花ハあら事

蜑や吐きをこなして雲の峰

也有

のびる程鳥ハ短き青田哉

何奴か草鞋すてたる清水哉 (也有)

夏

鳥

也有

和田峠

施すまゝ吟りし句文を訂て生壁るまゝ旅の香や　時鳥

雨に郭公と下駄と下ゐ給ふ女房も有ら　待つ窓よ接る松明を時鳥

悼楚中子文

弓張の梓まるまる時鳥　耳かへて先寝迄えてゐん時鳥

郭公文臺記

一聲や二見へ通る時鳥　雲ふさて猶ゆかし山時鳥

時鳥　俳師も耳を刻む時

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

時鳥 三聲四聲と啼て行く（也有）

蟹庵挽詞 呼かひもなし 蕎雀の雲霞

木曽福嶋 組板のなる日ハ南かす南る鳥

石代や物見の松も閑る鳥

横寝して聞く地蔵あり閑る鳥

蛙にかゝれて水雞とはいふものゝ

埴生傳坊 なき友よ泣くや山乃羽抜鳥

贈答法師文 心ともなめ安さはーゝー蝸牛

飛石も飛ぶ事ありて蝸牛

鬼百合や飛ぶ事ありて蝸牛

菖蒲ふく世話なき家や蝸牛

鴨牛齋賛 巣もなくて穴もあらん蝸牛

夜の明けて骨折見えず蛍狩

大将は夏羽織にて出る蛍狩

蛍とる供や書て付木賣

我やさへもとる夜明の蛍哉

書見てはまたなひ水も蛍ぶ

夏

動物（除鳥）

也有

焼蚊辞

火を取りて来ぬ蚊人を焼き消けり（也有）

蚊にくまたくゆる煙を浅間山

出女のにる蚊のおるくらやかな

蛍ともしいかほそや火取虫

蟬あつー松きふやと思ふまて

われとわの売やふ蟬の声

松の栗てつかる蟬の声

夏

木

禾菜

山も沼も真顔になつて若葉かな

此花と札はありて若葉かな

こきまぜる色のなき夏の柳かな

そちか野と扇けばや里も木下闇

五たびの牡丹を咲いて百日紅

咲きあます蟬の一期や百日紅

其うちを廿日わるん百日紅

先二江戸へ使に下る餞別ゝ

江戸を発す卯の花の中にから

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

夏

惜自若菴之

夕顔の穂の睫もぬる別れ哉
もとゞり2尉斗つけられて秋の
夕顔や挑灯つるす薬師堂
夕顔や人待つ女見つけたり
夕顔にあすの米あり袋あり
夕顔や行燈にゆつる長咄
夕顔や大工にわたす庁水場
夕顔や月の鏡も待たで曇る

夏草

送其當辞おつとといふ名はよべくものぞ今年竹

大井駅 筍にあふて家路も程近し
すゞしさは食ふたものとやし今年竹

除夜菜

村中にひまつと寺あり 棕櫚の花
手すさびの扇も題栗の嵐哉
熊谷寺 熊谷もはては坊主やけしの花
三平二満世の縁 誰 種ハ蒔きそこなひし美人草
猫自画賛 油断すな嵐の名にも 廿日草

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

也有

夕暮の幟握りこぶし牡丹
畫顔やともらの露も間にあはず
畫顔や傚稿殘る砂河原

讓菴名文

咲かゞ咲けつきすてし名を手鞠
借物雑借る人に手のよごれより金銀花
木曽桟橋眠るなと馬士叱れど百合の花

悼友喬舎

虫はまだ人を泣かせて夏の草

大井川

秋
時候
（秋暮暮秋）

大津

大津画の鬼も衣に肌寒し
すりつらす秋の木魚に爪のあと

社禪尼

ふるいおぼうず社禪に泣く袖もなまじ夜長哉

嘯花誄

社禪（かしこ）にも能い連ぶ山の秋の色

也有

塾海に宇左衛門尉と申す事をつかいしとき（八歳）
まで男のふ作の学び残るかふ

也有

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

秋

秋暮
暮秋

晩頃
友とそゞろ晩秋
浮雲なる峯の山寺の秋の暮
炮烙や物の煙も秋のくれ
小秋やひとりのつまの秋の暮
小秋や扉も敲もすきまなる

熱海
小秋の手ぬたに泊る鴎哉
〃 木の宮木のもとからまく秋くれぬ
小秋のふぐさをもとむる
三島汽車 膝乗て旅泥鰌の寒さや秋の暮

世有

(世有)

秋

人事

おもおもしくぬぎすてゝ
一つ衣木の実ちる外に
なき秋の夕暮
棚経やよその馬にも
乗て来る
多刈の行とゝもにて
寺泊
寺泊
寺泊

秋

器用
飲食
地理

釣舟や葉山子の子の小くぼの上

四方山の秋も新酒にそゝがれつ

富山の杉も里も新酒に一つ香

新蕎麦に様ざまの山の名残

栗飯の香にほふ夕餉かな

飯まそこらが秋の花もる

秋の寺野のやうに見えそ花も書屋

こゝろとゞれそもそもさん大根も畑

杉の林間月待の下に葉山

熱海湯前権現

新蕎麦や亜氏にあまたも有

はつ雪や白きを折ふしてかさす扇のすゝ動

秋後の七草粥を祝ひ合ふ

九月廿日 芭蕉先師 茗荷の子まつ初立の

蔭からしらも和名芸香

隠居料 胃腸うるほす柚味噌

(也有)

あら〻世や雨本の雲の長短　（世有）

信郎　誰すてゝ扇の海の花つゝし

湯野温泉　湯の山や鈴に交る染衣

すてはをらなや安山ふの子共

秋

名月
後月
待宵
十三夜

十三夜雨欠くたに何ぞ宵の闇

名の月芋が垣ねの月

病中　幢蜩ハ我気性かな

芋ばたにくぐみなき

あふむけな柳かな　新や小室月

海の幕山にハしらぬ月

井戸かもも一つ多きの月

義濃近江にて詩ある夜の月

大名の机打ち多き月見哉

蚊食ひ過ぎ巨燵ハいまだ後の月

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

熱海　山の湯も温飽にわるか後の月（也有）

樂老庵主像賛　湖に待笠に待てや月二夜

客未至而殺　望てそなふ心の月の十三夜

呼つぎのそれにいざよふ月の出

香木記　白の香や月の兎もかきしらん

思ひ入ぶかき人のもの雑なく里の月

忍ぶ犬を人のもとへと放ち食

月一つほやほやと笋のつれ立

秋月

（名月、待宵、十六夜略）

九月二日　蟠龍子

蟠龍は竿のつれ立

望權現　海と山両部に月の旅寝

名草浜　見えすくや名のみなれ水の月

猿のつらつらも水の月をさそふ

手水鉢鉢の水にてもてなす月の出

也有

大石寺 高井 て猿と月見んその上（也有）

送暁星辞 海らの宿おなへん月の旅ごろ

一色亭記 んありて晨やなし軒に傳の月

三月堂記 猿のまた神ともおもはしうの月

前賢讃 剃てこそ月にすこうの気味哥

秋天之部（陰月）

馬ぶんど牛や木幡の里も

干ものをすゝて帰るや柿の雲

帰雁や雪を時の一つづゝ

稲妻や写を時の一つづゝ

稲妻のかりの住ひの侍ふもの

星のかけ狂ふ秋の風

雲のゐや雪たこます春も秋の風

のち人の跡あれば雪に雪礼

そなのある梅花咲き天の川

雪をもねとつくれ八雲に光る

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20

ガラス使用

[illegible]
[illegible]

妙見宮
松[illegible]

熱海書院
書院[illegible]

熱海湯
湯[illegible]

秋鳥

寿亭記

吊不幸文

[illegible]

無洲より砚を贈る

[illegible]

[illegible]

[illegible]

栗柿のあるかぎりや侘住居（世有）

蛸を生てりくる一里又雪にのる。

栗をまぐ仲哉

山雀のさそふ籔有小春哉

鵙たゞ多いかなる木の末

雁たゞ啼ますもよし山おろし

秋

動物

（隠鳥）

狩人にあかさぬやどや雁の声

雲を持つる峯迄つゞく雁の声

雁追ひやぶる山も笛よりぞ情ふり

笑ふたる山も淀つゞきて落葉哉

〃　笛ばやす湯に有ます神を荒比哉

枕流亭にすゝく石もあらにまりくに

まくやけば峯迄つゞく鴈哉

たゞの宿に泊りて　さゝ根ゝ枕に侘しまりくに

去年見た籬の虫の声

世有

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

野の宮和詠に学ぶ（也有）

十年に一度側町の虫供養

草刈の笛もれ来る虫の声

勤下駄の音に寄る情哉

死のこれ一つ哀れ人比翼

悼海鼠

秋の幡になるまでの命かな

引きあうまでは人匠哉

秋木

門前の真に掃たる一葉かな

辛齢説

六十ぢかき身やそれたけのもみぢ葉

墻上桂樹

垣間見の鳥に木犀の白かな

猿引画

物乞猿猶かつの山もにくまれず

幡九楚

名を替を手にしる扇の一葉かな

桂川

ちり交る敵に柳や桂川

七十頃

七十や色かへぬ松の姿ぞり

あるにまかせて

もう一梅見よと木槿の垂かな

鏡つき内刻ちぬあたまにおる柳

也有

鳥居松と改めて再版

夜と書の日の色もかへて鳥居松

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20

ガラス使用

秋

五草

嘯花誄

芸苔やすゝき辻堂の行の光

葬や紺に染たる秋の蝶

葬の世にさへ紺の浅茅かな

尾花ちるかるかやへ白蔵を

異見りふ尾花や白蔵主

空もけて魂抜ゆかん花薄

野ぶとゝ狩りる過ぎり花薄

帳の用の枝にすわきし薄かな

釜蘭花文

露ハ袖萩のみそみとせ

墨染壹男かと見れバ黒木壹男也有

富士ハたゞ秋の色にこゝろ和推が安（也有）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

六歌仙図　貝にうつる中に一もと女郎花（也有）

秋

花苗（六章陸）

傍帙亭

蘭の陰

辻堂も一もと菊のあるじかな

陰ともなれる山の端の雲あり

蘭をさす香や蘭の花

闇に恥ぢて自ら異をさとるらむ

蘭の花

夢花巻

夢ながらの虫なきて夢の花

題五雄坊画巻

かりの人の埴ゆく野菊かな

掃なめの山を南に野菊かな

主留守を訪ふ

人をいとふ

お菜の花わけて

向菊酔我菊不足

もの門

也有

贈玄平庵主

秋草（花草隊）

綿の中に動くものあり　本綿取

熱田畫平井　雲ひまの　蚊帳井筒にまあ　男

影映　寿の花と西瓜祈らん　乾田姫

這ひのぼる　蔓のちからもわが天物

名も知らず　蔓のみ細道うづ山

雲にて　蓮のまがあと　刀豆たあり

鬼灯のそ　いて見れば門徒寺

飯仰さまそ　見よ　青嵐

五海郡杜　杜杜杜そ　の木へ

多くの水蛇をゆまかへて　萩の風

也有

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　　ガラス使用

鎌倉巡覧 守り給へ神もた旅の日すゞ（世有）

白菊の 十月の宮に白菊の名も苦

（東士）

冬寒さ

名茶杓説 茶にたわむ世や宗旦の形見なり

居風炉の熱さうでいて化ぬ事さふ

引越た跡次第のあつもの事さふ

鶴亀の五十こたる事さふ

萩枯て雪降見ゆる事さふ

北山に残張る雪の事さふ

垂に外もそへぬ事さふ

幟陽ハもとより冬の事さふ

鎌倉甚平氏
竜衛の孟子る
狭名竹伝
事里ろあて

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

冬

大根引

季語

膳今更菜大文　絵の中に動くものあり大根引
痩せたれど堂世かな月夜も大根引
青々と松納庵庭大根引くや野武士
山の如き大根引くや野武士
宇田調　大根引あと黒ばえる朱りよりる
季吟調　くるくる仕事ずり引くや大根機
共角調　今を小春見よ大根畠
許六調　手の甲で鼻ぬぐひけり大根引
惟然調　大根引ちかづきもいてそれなを
露川調　継母やたなふさ摑んで大根引

也有

立るも寒き冬の名哉（世有）

梅さくや生けよ生けよと見ん（終焉）

江鴻號穴　此洞を思へば神も冬籠り

冬

人事

（除冬籠炬燵囲炉裏）

手や茎（茎立菜）

白見せや霜にさらすの男郎花

みそ汁も汁の中や二夜会佛

編笠や雪に布引の滝かすみて

邪魔が来て門前賑ふ年の市

編笠や雪の後隠者の年の市

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　ガラス使用

節分賦　梅咲くく福と鬼とのへだて垣（也有）

金泰安の妻を哭する曲の節分賦　野送りの貧物ごとし年の市

日　雪ちらふ垣根の梅の花一枝

江鴻蔵穴　世間を思へば神も冬籠り

冬

器用

梅の花や巨燵は京の物語り

角のない人とまれて炉辺哉

我行の夜着にあたる旅寝哉

ちからまた牽たい子ども哉

おん起て乳母の舞の巨燵哉

一男坐なでつらん火桶哉

望までいとゞかあ寒の雪丈燵

炭売袋は七ツ吉て火燵哉

埋火や白うなる時明る哉

也梅

似合ひなと笠ぬぎ紙衣（世有）

勘當もせぬ子に叱る紙衣かな

訪前駅友緯
巴良の新婚を
賀す

襖坂の世をぬぎすてる紙衣かな

夜着頃

巨燵より梵妻の二七夫

賀基前駅長文

涙涙の水あらば阪神洗ふべし

冬天文

風雪（十七）

しぐるゝや笠と蓑とを二人旅

相傘に片袖ぬれてしぐるゝや

初雪に市人さわぐしぐるゝや

飛込橋にて富の字

八景のこゝら三つ三つしぐるゝや

百姓の家祝めぐりて

屋根ふきなをせばやしぐるゝや

幽霊説

幽霊説笠もて幽霊洗ひけり

鳥の羽をむしる圖

寒そうな鳥の羽むしる時雨かな

草風談

誠とはまことなりけり初時雨

熱海

大湯やけぶりて遠眼鏡

（世有）

雨六畳を過ぐべからず　以上もと陶（世有）

雨六畳をうごくべからず　狐さへ五こんとうかす霜夜かな

一老翁画讃　菊とうしくもも懐戸　霜の朝

菜も苺もあり畑の霜まもる　天神

飛石や梅のまばらに霜の花　遊里

朝霜や誰送りけん下駄の音

武蔵野に霰一つなり冬の月

菓子薬喰　薬喰こきおさめけり

冬・天文

風　雪

熱海

風や汗手に抱る鏡の蓼

風やはへとらるる鴨一川

雪請序

雪つもの起しそめけり竹の声

雪の朝雪へかけたる雪の塵

鶏のとなりかねたる雪の暮

雪の頭の水にたゞなり多嵐

谷の一軸をとゞめぬ世まで

蔵人傳

ものあとや雪の竹

春そめて楽起きそや妻き雪の竹

海つゞみなるを巨燵に雪見哉

也有

雪の日秋水を送る　空舟を転へて雪乃名水（也有）

天満宮奉納　拍手や木ぬこの雪の門　松乃雪

女の雪にぬく圀　雪の暮どての巨燵に待つ人で

三宮亭　巨燵賣る茶屋あらば野の雪見哉

花と見て綿も見さて雪の宿

面白の雪北路あけや小提灯

冬

地理

動物

此海老
空大ク

傳へ聞く茶たはむ水の水汐

五六羽の鴉下り居る杜鄙汐

塩賣の裏に書流の杜鄙汐

扇風裏に書流の杜鄙汐

雪村に人を見送る杜鄙汐

杜鄙にとゞまりいる蔦汐

雀の名さして杜鄙汐

こもる日を岡へで杜鄙のきり〳〵

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

也有

足跡を波にとらるる千鳥 〃
火を一つ沖に見る夜の千鳥 〃
関守に寐よとて遠き千鳥哉
木守の柚に来て鳴くや鶺鴒
散た木へ戻る一葉や鶺鴒
鷹狩や此田に殿のた足跡
妻にわかるる 又あはぬ別れをいかにみぬくめ鳥
釣針の智恵にからぬ海嵐哉

冬

植物

松操庵記

榎の嶋

此神の御手にや白ふ枇杷の花

鎌倉盛久が首の座盛久か命や濱の鬢り花

蝶々も命なりけり花返り

とて返り花

林間に風呂焚く迄の落葉哉
こちの木を隣で掃く落葉哉
朝々の釣瓶にあがる落葉哉
一本の榎に町の落葉哉
吉野にも落葉や櫻計り哉
落葉にもたらぬ花香の松言あり

也有

飯の三石の掟を守るべし

茶の花や一ぬかるみ寺の畑境

武蔵野や今小茶にたく枯尾花

水仙や庭に待たせて数に咲く

水仙に書見る露や今朝の霜

芍薬の賃も叶はず冬牡丹

又ほん菊より後の根深畑

女房に一夜あられん根深汁

某別墅記

雑

富士の根の雪たゝのうと三保

望嶽楼記

月花に酔ん富士見る日の隈

名徳利説

月に雲花に風の徳利の四方面

銀賛

宝筌之

玉樂庵記

月花の富士をあらはす秋の空

吟江

江戸
加之舎吟江（天明三年七月没）夏目氏成美弟

春時候

餅くふて酒飲でさて宿の春
のどけしやふりあぐる時斧の音
朧夜や火さきしられぬ遠篝
朧夜や下戸の覚ゆる酔心
朧夜や我足音のふり返り

題画

悦きたあー茶に長き日をたのしまん
春惜む宿や端居の茶漬飯
行く春やたんくれていそぐ蝶一つ
行く春や一時づつに鐘の声

花も散りぬ世いろきもの一と行春
行く春やいまだ櫻も散りあへず
花散りて家の奥暗—春の暮
古くさき袷とう出す晦日哉

春
人事
地理

出代や所望一かめる庭の花
初午に賑ふ王の春べかな
初午や百人前の杉やうじ
初午や昆布に山椒のあり借屋

新宅に稲荷を勧請申す祝

初午やけふ新玉の殿つくり
雉のこゑを籠に取りたる茶摘哉
春もはや袷着て出る茶摘哉
散る事を花に教へて涅槃哉

春人事

葭の根をめぐりそ解くる氷水

春天文

亡父三周

精出して陽炎もゆる朽木哉
陽炎に身をする猫のつれ〴〵
陽炎や一どころに草の焼けと昔
日について陽炎まはる廣野哉
陽炎や居眠る猫の鼻の先
誰人の忍び車ぞ朧月
其年の其日も月ハ朧哉
面白の水の行へや朧月
打つ波に音なき磯や朧月
あれ杉の葉の重なりや朧月

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

物陰の闇も朧や春の月
つめたさに梵鐘鳴くか春の雪
行く雁の取つて歸るか春の雪
笘あけて見るや夜船の別霜
春雨やさらば見ぬ世の人を友
春雨に濡れて晴れて見たき心かな
春雨や手除に晴れて海の果
佗ーげや賣る餅くふて春の雨
春雨に陣の時計たのもしく

春

動物

のら猫や妹がり行けば鼠鳴く
鶯の足踏みーめる初音かな
鶯やこちらの枝へもう一羽
物音にかしこなき猫の別かな
杉苗に身を隠ーてや雉の声
焼芝や隠ーかねたる雉の顔
雨雲をたなすように上る雲雀かな
囀るや揚る雲雀の共力
白良が衣かへーて舞雲雀
園元も花が咲いてか帰る人

蜂の巣や走りて過る兒二人
散る花に姿羽ふて胡蝶哉
初蝶や風をたよりに日一日
白魚の客み姿や四日月
およく見れば小鮎走るや水の底
初蝶や京めつらしき春の空
藤棚の下出かぬるや蛇の声

春

春木（櫻花ナシ）

吉野のみか梅の杉田も花ハくく
霜解や遠餘所ながら梅の花
男子の生れ
紅梅や玉のやうなる芥舌 引
天神奉納 神詠ふりハ無の葉負くふる雪に
紅梅に匂あたゝめる雀 引
梅とふ悲一い花が咲きまゐ
遠眼みハ空からさがる柳 引
若たれ〳〵日に若かるも柳 引
朧夜の戸みたさまよる柳 引
雨の日に手をたゝ引たる柳 引

夢想

春

園中

正月になりすゆる柳哉
影程ハ動かぬ土手の柳哉
青柳や動かぬ折ハ水の影
水の上に塵居させじと柳哉
散る中に答の絶えぬ椿哉
海棠やコップにうつる花の色
畑打のやすみ處や桃の陽
能過たる日和に咲くや梨の花
鶯や梅ハ散ても桃の花
桃咲くや虫よ桑ある窓の先

春

櫻花

鬢くきに櫻のかゝる白さ哉
白雲の花の上行く嵐哉
櫻から出入る人や阪の口
旅せずに見たるや里の初櫻
世渡りの櫻貧るあり花の山
墨る日ハ墨る姿の櫻哉
咲いてより散らぬ日もなき櫻哉
一本の日数をたのむ櫻かな
寐て知らぬ夜ハの雨を花の貝
思ひきや花みまくらに来てぬる旅鳥
春知らぬ木ハのどかなり花の山

行德の宿にて挨拶

吟江

東盤春知らぬ木ハのどかなり花の山

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

吟江

花下忘歸因美景鑓持の居過ぎ頃や花のもと
貪嗔癡の内　痴

許されて目うつりすや花の枝

六尺の雨もよよ花の白小

可憐な景色春花

花なれや山小雪降る夕日和

浙江が洛へ旅立ち時

散る迄と都の花に長居すな

櫻ちる木の下陰寒からて

この雪を空もしりてか花曇小

曇る日を人をみはかる花見小

人里につられてやはる花見小

櫻見てをや春惜む心小

つばむすり散るを心の櫻小

花や礼小法師といふまま

春風や世八七こゝら八重櫻

此頃の森のくらみより遅櫻

弥生十日餘上野にて

春草

吟江

休みたるあと〳〵休らふ葦小

陽炎に形が出来て厩小

菜畠の皆花なるよき日和小

あたゝかや苗種まく川のへり

菜の花や小判の色も知らぬ里

菜の花や蓑屋見こて山畠

雞よかき出されけり路の蔓

見つくれバたゞとこ迄も葦小

曳いて行く耙みかくる葦小

山吹や低う飛び行く鳥の影

桶を漏る水のはやきや菜種干

山吹や岸の崩を雨上り
山吹の陰も日のさす一重哉
山吹や花なき蕊も雨上り
山吹や風吹くく方を枕癖
山吹や実のない事をはぢ給ふ
見渡せば藤なき日のさす嶋の陰
曇る日や一倍長し藤の花
物なくて根ざくり藤の花
白藤や朧の春も是かぎり
野を低く遊ぶ胡蝶や菫草
あら鍬のさきに詩むる菫かな
連翹や下枝もちらで一雫

校四太刀の高名

夏

（生物ナシ）

浙江亭ヨリ長堤ヲ一浴ム歩鶏ガ雛ノ如キ手ヲ一浴ム歩鶏ガ雛ノ如キ手ヲ一浴ム歩鶏ガ雛ノ如キ手

山陰に湖暗――五月雨

地車に油をぬるや雲の峰

立ちあがる夏の雲雀や雲の峰

巌れ井や鰥も動かぬ雲の峰

なつくさや其葉ごとに白き雲の峰

弐鳥の巣のかくれたる青嵐

細解けて流を清水を掬びなふなよ

夏（里ぬち）

そくばくき雲すそを送りて

強力のひとりたくまし清水かな

平らなる石にも走る清水かな

膝もとに細き蚊遣や夕会佛

行脚僧都耳をかす囲炉の

明ぼの蓑ともなれ

夏

生物

蚊一つに寝て居られますや人心

鰻釣る沼の濁りや時鳥

雲かくす八阪の塔や時鳥

あすは又川こゆるに夏の水て聞く也時鳥

時鳥顔にかくるや扇 托雨

静かさを石に焚の歩み哉

吹き落ちてあばー水行く螢かな

蒜と共に流るる螢の火

雨の夜の葉裏をつたふ螢哉

時鳥蒜をの朝露こぼれ哉

吟江

秋

時候
天文

八月や青い空から　二　日　月

朝顔や四五日咲いて今朝の秋

打ち止ふ咄のあとの夜寒かな

行く秋や蚊帳に別れて廿日程

秋風や顔にかゝりし　蜘の糸　秋風やへよかけたる蜘の糸蓼太

ときれ〳〵　覚束なさよ天の川

もとすゝきや桐に隠れて天の川

白露もさそいてそよる早瀬かな

李門寺町　こおろぎ　膝かり　寒し　石の露

淋しさや土にこぼれて露の色

編笠の日にすく顔や芝葉陰

懐に卵の花白き夜明かな

若竹やのびる指ほに古葉散る

書顔の猶咲きたつや草いきれ

杉もたかやはてりのともむ田のそれ

山蟻の牡丹の輪をめぐりけり

見通すや竈の裏手の苅あの花

麥畑や刈りこまれて鳴く雲雀

汐風やそよ〳〵ぬ麦のすそ畠

秋近し　麻刈るあとの夕日影

書顔の暑きさかりや笠の幅

朝霧や高みを過ぐる水の音

呉服が淀へ
おもり時

しら〳〵あけやすくて秋の雲

門口や油白ふて盆の月

図面ハ水の上行く月見かな

うしろ向く人も月見の姿かな

書物に蟲探す月見かな

名月や踏むあと消ゆる濱の砂

名月や星ハそらりとおそろれ

側へ来て雲も消ゆるや今日の月

行く秋や門へ出づれバ星月夜

鎌の刃をつくふて寒し草の露

なき立て柳ちりあハせて駒迎へ

ものはてハ土町ゟ菊の香

飛いのいて案山子見て居る烏ゝ

風のあと起しておはる案山子かな

秋

（降時候天文）

其土て埴刺つゝ蜀黍

二つ三つ雁にたくる帆影かな

菊畑や人丈つゝ垣落

風かれて草の実赤し鵙の聲

夕紫の不二を見て鳴く鶉かな

ゆくゝと乗戸そゝる苗地や栗を刈られて鳴く鶉

南京の陶物や菊 呉蘭亭 土器の油へる夜やきり〳〵す

菊の名

吟江

朝顔や光をさやる朝の月
稲妻にさらりと裂ける芭蕉哉
秋風や薄も共に弱りけり
ゆらゆらと薄に立つや鹿の角
叡山のあたりめる柿の実ぶり
秋日のあと起きあがる野菊哉
月影やおかふ家の
菊の香に酒煮る休む山路かな
辻角の月さすかたへ
帰るかり
早稲の香や赤うち出でたる森の月
鎌倉
早稲晩稲やしきしきのかきね哉
白壁の黒き手ぶり
唐黍の刈跡広き月夜かな
未枯やねぐらを求むる夕鳥
稲の中を泊まりて出たり渡守

角田川吟行

思ひなしか頃も小春の朧月
人につく蝶や小春の縄手道
花の咲くものを数へて小春哉
朝起す小春の草のほのかなり
傘さして暑き小春の日和哉
雞の卵かへて冬至うな
蒲團から針探り出す寒さ哉
古風なる寺の欄間の寒さ哉
懐に鼻紙きらす寒さ哉
き札過る小刀の刃の寒さ哉

冬
時候
（歳暮之部）
雨名

吟江

何事もなき寒さや留守おもり

直間継橋　こなますする水音寒し　橋二つ

蜜柑焼く匂ひや冬の夕間暮

只明るきのみにて待居るる冬の夜や思ひかけずも雁の声

櫻山といへる冬なるに朝日に匂へ櫻山

総寧禅寺　梅櫻冬ごもりの無一物

冬歳暮

修行菴　赤土に日影すくなき師走かな

隠れ家の門松に見る年の暮

巻紙のこころ細くも年の暮

押しあふて年ハ暮ぬる市の人

雪霙降にまぎれて年暮ぬ

身一つの物ならばいかみ年の暮

いそがしき真似して出たり年の暮

行く年や春のよろこぶ物忘

経年や佛の棚もかざり蒿

行く年や梅のたしなき咲

行く水に氷れど年の流れ哉
氷りぬる下もあしなの春の水
なと惜む明くれがへる年なるを
つこもりは又来る年のもの哀
松立てこゝ迄落付額や年の暮
年の夜や一人て焚る釜の下
千金の宵は つもりて大三十日
福茶や まづ軒近き春の色
日の春も待そば来にけり年の内
焚鳥も梅も人会點か冬の春

冬

神佛叟

芭蕉忌

芭蕉忌やしぐるゝ塚の筏庵
芭蕉忌や訪ひ来る五十雀
芭蕉忌や五尺の葱に水かけん
芭蕉忌ぬかつくや冬の扇を脇の前

悼

その松に昔問ばや桃青忌
百姓の家に物売る十夜哉
榎から幕張りわたす十夜哉
哀れ也世は佛たのまん神の留守
明方や形を写しまゝ

鉢叩

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

鷹のもう待たるや日蓮忌
御影講や糊の櫻の吉野紙
煮一茶に客を呼だる亥子哉
伊勢海や舟に客呼ぶ東講
千金の春も名のみや夷講
けぶたさに囲こぼすや炭取哉
柚の白い坐を静めけり炭取
臘八や雪ぞと悟る夜の寒さ
臘八や庭に榾焚く山の寺
聞なれて来ぬ夜思ふや鉢叩
世の夢をさまして来たか鉢叩

冬

爐
炭
衣服
藥喰

我ために夜更る玉の火桶哉
炭竈や夜の間にさめて朝の霜
炭竈に月みちのくぞ恋しけれ
押やりて庭の雪見や置火燵
押あてもやごてうたゝねに火燵の夢や
埋火を力に寝るや枕もと
いたゞくや着なれて古き紙衾
寐たなりや鼠の笑ふ紙衾
その音の時雨にまがふや紙衾

人のなみだを　夜に猶涙の雨とみる　人丸

著て立て打こゞたる衾かな　近付の見ぬ顔したる頭巾かな

難題
大黒の掛乞

掛乞の内へ入ても　頭巾かな

貰ふたる礼に著て行　頭巾かな

紙衣著て人に紙子をすゝめけり

雪雲綿の落つく衾かな

覺束な人のまめの藥喰　たのもしう寒を待たる藥喰

陂道を雪車にのつてのさ〻づ〻

出がらに宿のそかれて　冬籠

たゞ炭になるを心や　冬籠

春来ても出ぬ思案を　冬籠

浙江毎立賀

静つかりとめなりうら　冬籠

この宿に月日遅しや　冬籠

立籠る苟屋の句ひや　冬籠

日切に菜賣の声や　町住居

炉開やたきらめの肉をもとら時雨

餅つきや水汲はる桶の星の

冬人事

（除神佛事、燈器衣服等にとゞむ）

餅つきや大影に見れば古き家
文箱の戻るを待て衣配
餅つきや病て居て聞けば両隣

空即是色何もなき菊の花壇や霜覆ひ
ありやこの梅か香よりも納豆汁
白菊に白いをかしや納豆汁
顔見せに雪に明たる夜深し
松風の音も心の煤掃
人まねや猿の煤掃

東海近き処に居を移すに

冬天文

芭蕉忌雪行も其日に似たかもら時雨
押て行く時雨の幅や海の上
稲塚や倒れもえてず夜の霜
病牛の隣に吠ゆる霜夜哉
時雨〳〵に聞き参らん楷端ル
氷仙の根に多たまる霰哉

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　ガラス使用

雪の江や岸を離れぬ島の声
水鳥のあとへ〳〵流るゝ吹雪かな
五六日曇りて雪の一夜かな
雪の笹神うちはらふけさうあり
炉の炭の崩るゝ音や夜の雪
榾もゆる音静かに雪の朝
寒空に向ふや利根の大根舟
けもの〳〵一ツ不断櫻に初時雨
枝たるす木の口白し初時雨
吹ちらす山かげ引粉に時雨かな
一ト礼過て出るや松葉掻

冬
地理
動物

足音に鳶立つたる枯野かな
土落ちて松の根高き枯野かな
角力場の跡枯し残る野中かな
鴨の食物探す冬田かな
枯芦の根にすがらむや初氷

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

水鳥の胸に嘴置く浮寝哉
水鳥の水に影さす夕日哉
平押しに入江を渡る千鳥哉
鴛鴦の一度に鳴くや月の入

冬

植物

からくと明り障子へ落葉哉
から風の木の葉をおとす石間哉
日あたりのとろくと寐れば木葉散
雞の羽うつて立つや散る木葉
枯れはてゝ一葉残るや赤柏
散る時はまことの雪や帰花
なかくに雲とまかへし帰花
帰り花我も先に鳥の声

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　　ガラス使用

つめたさのからき思ひや大根引
ふんばりて引けば根浅き大根かな

芭蕉忌

今日の日やまづ目にかかる枯尾花
水仙や先づ思ひ出る炉の白ひげ
襷して脇ら〳〵と大根引

冬

摂津

與謝蕪村（天明三年十二月廿四日没）六十八歳

（句ノ下ニ行ヲ書カヌモノハ句集ノ句ナリ）

春

時候

春々（春宵・暮春）

歳旦を一たり貧なる俳諧師（蕪村文集）

我門や松はふた木を三の朝（新五子）（蕪村文集）

歳旦辞

日の光けさや鯨の頭より

蓬莱の山まつらせん老の春

烏帽子袴のさはやかなるはよく見し指面郎狄
（烏帽子袴ハ誰トノゝむこかねぞ）

羅り出たものは物くさ太郎月（ふたりづれ）（安永八杜若）

閑の戸の火鉢小さき餘寒哉（新五子）（新題林集）

遅き日や雉の下りゐる橋の上

蕪村

懐舊　遅き日のつもりて遠き昔かな

遅き日や草を草もる大手前(イ)

池田より炭くれし春の寒さかな(イ)

遅き日や硯洞ゆる京の隅(イ)

折釘に烏帽子かけたり春の宿(蕪村句集)

春の夜に尊き御所を守身かな

春の夜や宵曙の其中に

朧夜や人ゐる梨の園(イ)(新選)

春の夜や幽を捨る町はづれ(新五子)

春の夜や狐の誘ふ上京(イ)

もちこしの詩客六千金の宵を
惜みし我朝の歌人は紫の曙を賞す

與謝蕪村（天明三年十二月廿四日没六十八）

歳旦帖

歳旦や松に門ある小家がち

歳旦や古き都の神仏

春時候

日の光けさや鶯の笠の内

（春夜ナシ　暮春ナシ）

蓬莱や山叢り生ん老の春

閑の戸の火鉢小さき餘寒かな（新類林　新五子）

懐旧　遅き日や雉の下り居る橋の上

遅き日のつもりて遠き昔かな

遅き日や草を草もる大手前の公達に狐化けたり宵の春

蕪村

几董とわきの濱に遊ぶ一時

節違に浦團敷たり宵の春

春の夕絶えなんとする香をつく

閑遅日や法華聞ゆる春の寺

開帳の錦無礼たり春の夕（蕪村句集）

箏閑に香炷く春のゆふべかな

燭の火を燭にうつすや春のタ（新類林）

春の夕ののきぬ羽織きくらすも

西山遅日

山鳥の尾を踏む春の入日哉

池田より炭くれし春の宿の

たのための低き枕そ春の暮

うつゆせよ皆並べよ春のくれ

白いある衣もたゝまず春の暮

大門のたもき扉や春のくれ

山彦の南へいつち春の暮（新類林）

居風呂に接の師匠や春のくれ

折釘に蝙蝠子掛けたり春の宿（蕪村句集）

あちら向に昨日の人や春のくれ

日暮〳〵春や昔の思ひかな

春

春夜

暮春

春の夜や徘徊の灯の上壁の

春の夜や徘徊所なき身哉

春の夜や盥を捨る町屋つゞき（新花摘）

もろこしの詩客や崎の遊女

春の夜や月朧なる梨の園（新選）

春の夜や宵曙の其中に

暗夜や人待ち顔の女房

遅桜なき返魂なき

行く春や紫きもの筑波山

行く春や鳥啼き魚の目は泪

行く春や歌の主

行く春や重き頭をもたげ兼

行く春や撰者を恨む

行く春や逡巡として遅櫻（蕪村句集）

行く春や百年あとの事ども

行く春や横川へのぼるいもの神（蕪村句集）

蕪村

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

蕪村

召波の別
筆に述べて

行く春や重たき琵琶の抱心（新五子）
行く春や白き花見ゆ垣のしま（蕪村句集）
行く春や鳥啼き魚の目は泪（新五子）
行く春や歌も忘れず（聞えず）行く春や
洗豆の塩も溝うる行く春や
春惜む宿や近江の置巨燵
春惜む座主の連歌の名残哉（新題林）
春燈して庭踏ない人も春惜む（新題林）
けふきりの春を歩行てしまひけり
歩行〳〵物思ふ春の行へ哉（新五子）
また長うなる日に春の限り哉

春のくれ筑紫の人と別れけり
春惜む人や榎にかくれけり
たきゝくも物思ふ春の行へかな

畑打や耳うとき身の只一人
畑うちや峯の清坛の雉の声
畑うちや道問人の見えずなりぬ
畑うちや一重の札のもとに
畑打や我宿も見えず暮遅し
畑打や鳥さへ宿もなき山陰に
畑打や寺の鐘供養
畑打や大内寺の男ぶり
畑打や畑うつ雲もなかめ哉
畑打よこちの左右の種の時
耕や五万の栗のあるじ
畑打や細き流をよすりなす（新五子）
やぶ入や中山寺の男ぶり
やぶ入の夢や山里の葱る頃

芭蕉庵
寒

蕪村

炉塞

やふ入の宵ハ狂女の
隣ル小の
やぶ入をまつ子安の
地蔵尊の
春風馬堤曲
やぶ入や鳩にめでつゝ男山
やぶ入や浪花をいでゝ
やぶ入やよるもあなづの
やぶ入や寺うち
やぶ入や伽藍
やぶ入や
出代や春さめ
炬燵やゝ床ハ
春夜廣會
炬燵して南院の風呂の火
炉ふさいで立出る旅のいそき
春日
人事
畑打、藪入、除
出代、炉塞、除
器用
飲食

海苔すゝ水の一重ね　宵の雨（新五子）
雛は女や京を富る
佛忌の鐘ひゞく
初午や島田四堺の
初午や物種
初午や
佛忌の
ますます
古川の
蕪村
一字佛
大和
命婦
（蕪村）
（三重村文集）
（新五子）
（新五子、袖草紙）
両
種俵
種
（蕪村文集）

古雛や昔の人の油火帳　（蕪村）

雛の灯にぬきか秋かるこの雛屋の灯を引次や春の雨

衣手に露の光や紙雛　雛祭るおもはゆる女や桃の月

箱を出る顔うつくしや紙雛　（蕪村句集）

ならわらつすめありや雛の宿

卯の花のなを埋にけり父と母　（新五子）

一とせの茶も摘にけり父と母　（新五子）

三椀の雑煮かゆるや長者ぶり

春雨　上

蕪村句集ノ部

春雨や身にふる頭巾着たり

春雨や物かたらんと行く蓑と傘

春雨やくれなんとして行く有

春雨や小磯の小貝ぬる程

春雨やいざ歩ま月の海半

春雨や細き枝たに小提灯

春雨や雛や春の雨

漉に灯をともしつゝ春の雨

物種の袋ぬらすな春の雨

柴漬の沈みもやらで春の雨

ねなは生ふ池のみかさや春の雨

春雨にて　春雨の中に朧の清水かな
労中吟　春雨や物書かぬ身のおりもなる
西の京まけ物往みて久しくあれてたる
家あり　今八其沙汰なくて
春雨や人住て煙壁を漏る

春雨（句集ニナキ句）下

春雨にぬれて屋根の低き（新五子）
春雨や珠数繰落したる　潦の
池と川と一つになりぬ春の雨の
春雨に下駄かふ泊瀬の法師かな
春雨や鶴の七日をふりくらす
春雨にめくら鹿君の背中かな
春雨や蛙の腹はまだ濡ず
春雨や同車の君がさゝめ言
春雨の中を流るゝ大河かな
粟島へはたし参りや春の雨

栗めし一椀のために五十年の歓楽をむさぼらんとす

しくせんとふしし菜にあそぶ花に

たはむれさめて何うらみなかむ心には

春雨や蓑着て笠着て高塚前吟

右眞筆ヲ見タリト高塚節吟

春雨

（白菜うすき）

春月

女俱一て内裏拝まん朧月

薬盗む女やは有朧月

よき人をやどすい家や朧月

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

春夜聞琴

瀟湘の雁の涙や朧月

春月や印金堂の木の間より

海苔掬ふ水の一重や朧月（新題林）

伽羅くすべ人の假寝や朧月（新題林）

月おぼろ高野の坊の夜食時

朧月大河をのぼる御舟哉

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　ガラス使用

朧月蛙に濁る水や空（新五子）
草臥て物乞ふ宿や朧月（新五子）
手枕に身を委すたり朧月（新五子）

春天文

除雨、月

草霞み水に聲なき日暮哉（塵なきゆゑべ也）
高麗船のよらで過ぎ行く霞哉
指南車を胡地へ引去る霞哉
背の低き馬にのる日の霞哉（新五子）
殊更に唐人坐敷　初霞（新五子）
山寺や撞きそこなひの鐘霞む（新題林）
河内路や東風吹き送る巫女が袖
暖簾に東風吹く伊勢の出店哉
野袴の法師が旅や春の風

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

蕪村

片町にさらさ深るや春の風
無為庵舎曙の幕や春の風
春風馬堤曲　春風や堤長うして家遠し（新文集）
春風のつまかへしたり春曙抄の
春風に阿闍梨の笠の白引の

郊外

陽炎や簀に土をめつる人
陽炎や名も知らぬ虫の白き飛
陽炎やいそみあへずし土龍の
雪解や妹が垣穂を見渡せば
雪解や鳥噛え著る草の土
笠の緒の浅りて濁る春の水
蛇を追ふ鶏の思ひや春の水
椋なそそりくさんとする春の水
春の水山なき国を流れけり（新選）（新題林）（新五子）

湖や堤田つくらを春の水
小舟にて僧都送るや春の水
流れ来る清水も春の水にいる
一のくあよ小雨ふり出す焼野の雉
野と共に焼る地蔵のしきり
鳥噛え著る草の土
笠の緒の浅りて濁る春の水
蛇を追ふ鶏の思ひや春の水
椋なそそりくさんとする春の水
春の水山なき国を流れけり（新選）（新題林）（新五子）

春
地理
土理

里人よ八桁つくれ麦の水
春の水堂つたなをめぐらし行
春の水
春の水
春の水
流れ来て池をとるや春の水
春の水
春の水

春のあしねもすのたり〳〵哉

梦说帆风虫のふと流さん春の海（蕪村文集）

物焚た乞食の火より焼野哉（新五子）

（蕪村）

春

立つ雁の星もとよりそ春の水

春

鶯

蕪村

鶯のなくやちいさき口あけて

鶯のに枝をうしろに高音哉

鶯の聲遠き日もくれよ〳〵

鶯の養相がまし〳〵初音哉

鶯を雀かと見しそれも春

鶯や茨くゞりて高う飛

鶯や家内そろふて飯時分

離亭鶯のあちこちとするや小家勝

画賛鶯や賢過たる軒の梅

鶯の二聲三聲のほとり哉（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

鶯の鳴くやうとの、河柳（新五子）
鶯に終日遠し畑の人（新五子）
鶯や梅ふみこぼす糊の屑
鶯や堤を下る竹の中の
鶯の枝踏みたつす初音かな
鶯の帚やあちら向こちら向き
鶯いやよ宗任が初音かな
鶯や笠ぬいの里をつれの
鶯や野中の墓の竹百竿
鶯や柏峠を大たれか永き

春鶯下

低き木よ鶯鳴くや晝下り（新題林）
撞木町鶯西へ飛び去りぬ
留主守の鶯遠く聞く夜かな（新五子）
鳥來て鶯餘所へいなしぬる（新五子）

老鶯兒

春もやゝあなうぐひすよ音聲（新五子文集）
筆に鶯鳴くや忘れ時の
家あらて鶯聞かぬひと日かな
秋窓の鶯聞んと野にいでゝ
鳴あへて鶯飛ぶや山風の
今朝來つゝ鶯と見しよ帶かで去る

春燕

乙鳥や水田の風に吹かれ良
乙鳥帰て夜蛇を打つ家引
大津絵に筆落し行燕引
大和路の宮も藁屋も燕引
燕や去年も来しと語るかも（新五子）
燕帰る時ぞ定めて巣つくる塔の前（新五子）
わりなしや燕巣をつくる間を出る燕引
ふためいて金の間を出る燕引
飛魚となる兒有つる燕引
細き身を子に寄添る燕引
花を帰く聲となりもなき燕引

春燕

河内某の宿に居ぬ日や雉の声 ①

雉啼や浦里御坊の岩畳 ①

むくと起て雉追ふ犬や宝寺 ①

几山や何にかくれて雉の声 ①

亀山へ通ふ大工や雉の声 ①

木仏の陰に息たる雉子哉 ①

雉啼や苔の武蔵の八平氏 ①

雉鳴や阪を下りの驛舎 ①

日ながら雉うまや山へ引 ①

柴刈に岩を出るや雉の声 ①

雉子啼て（庵一新五三）

雉啼やさくいなのめの朝日山 ①

（蕪春吉）

春鳥

（蕪春吉）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

きのふ去に
きりぎりすいよ〳〵のなき収り（蕪村）

下りて門田もまくらいろ

物うき門田あの月のくもる夜に

花よきぬ人の somewhere あとをあうめる

死びとうかす矢竹 仙寿親雀

泥障をそ雲雀の声（不二新五子）

春

蛙

若鮎

蕪村

連歌して戻る夜島羽の蛙 引（新五子）

獨鈷鎌首水かけ論の蛙 引（新五子）

只見ゑよ夜明けよと鳴く蛙（新類林）

苗代の色紙にかゝる遊ふ蛙 引

たよく時よるべなきさまの蛙 引（新五子）

うき〳〵の蛙 引（新五子）

風なとて雨ふれと呼ぶ蛙 引（新五子）

閨に坐して遠き蛙を聞夜 引

月に聞て蛙なのめる田面 引

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

春

春

春動物（雀、鳥、蛙、鮎）

梅

伊勢武者の老こゝろにとまる胡蝶哉（新五子）
島原の草履に近き胡蝶哉（新五子）
釣鐘にとまりて眠る胡蝶哉（新題林）
うつなきつまみ心の胡蝶哉
揚土の小雨つゝめなき田螺哉（新五子）
静かさやたゝて水澄む田螺哉
大立て驚破田螺の戸を閉る（傍題）
そこ〳〵に京見過しや田螺賣
なつかしき津守の里や田螺和（新題林）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　　ガラス使用

蕪村

捨し残す田螺に月の夕べ哉（新類林）
（秋）
鰡躍て水や田螺の戸々な待る（イ）

神棚の灯ハ急しや雨の軒（イ）
今年より奄ぱ（庵時）（新五子）

山蜂や木丸殿の（イ）
出船や蜂うち掃ぶ水なし樽（イ）

（新五子）
（新五子）

春雨や（蕪村）

春

水ま散りて花なくなりぬ岸の梅（イ）

きもーろを富よいて梅見ぶ（イ）

梅

（紅梅ナシ）

白梅や志那花にも仏たぶ（イ）

あらむつ（ー）●の俤名物のやな
字備に含ちえハヤ、きよ

住吉に天満神の梅さきぬ（イ）

蕪村

こちの梅となりの梅も咲みだり（イ）

白梅や誰ぐの客ぶ（イ）

白梅や墨芽ーま（ー）隔膿紙（イ）

白梅や山野の茶店に角力取（イ）

梅園に裡引ずる（イ）主かな（新題林）

梅咲て毒買ふ宿の通女（イ）

梅ちる夕燈鉦こなる卓の上（イ）

梅咲のこれのむやらあーやら（イ）

白梅の枯木にもとる月夜（イ）

梅をよ（ー）南すべく（イ）

梅折て船手にかうる菓子（イ）

梅が香の立のぼりてや月の暈　六宿の梅　杉風　（蕪村）

草庵に　もとの梅よ　遅速を　愛すらん

散るたびに老行梅の木末哉

原八そうそうとして梅のあるばかり

野路の梅白くも赤くもあらぬかな

小夜ふけて人もの梅のつぼみ侍

風鳥の資ふこほり哉梅の風

一羽来て寝る鳥に行梅の月　蕪村

塊よ皆うたた梅の主ふ

鳥さへを尻目よ苔の梅さきぬ

梅が香にのっと日の出る山路哉

梅ちるや宝籍を売ふの如くせよ　蕪村

とは政芸刻なるを戒め給ふかこまかなるまにまにおもて

かはなりのふためき飛や梅の月

限りなき雲の海より鳴雷の　新五子

鳴雷の植木屋か梅咲よけり　新五子

異邦師か古きやとりや梅の花　新五子

御勝手に春正か妻か梅の月　新五子

春

紅梅

柳

椿

禁城春色
暁花繁々

蕪村

紅梅の奇花悠々人馬の塵

紅梅や比丘尼より高き比丘尼寺

紅梅や入日の影ふ松かーいの

書柳ドふ大方の草の木こう

書柳や花生の中の苔の中

柳ちて柳さびけり雨のしま

若草に根をこそれる柳かな

柳ちて井一なりー柳かな

生る柘をうるとたらや柳かな

百歳の姿もうつな柳（て）

此句蕪村下署名ニ角兵ヒ柳ノ図ト賛ニテ見タリ其画ハ偽筆ナ

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　ガラス使用

櫻花ト天文生物

蕪村

古寺に茶筌を乞ふ櫻かな　（蕪村）

五人の客石に床几く椿かな

あちこちや門前の小路掃ふらん〳〵と霞ふみ過る椿哉

柳から日の暮かゝる野道かな

門前の蛭か柳か糸かけぬ

柳にもやとり木ありて柳下蔥

不二たゝん〳〵十三州の柳哉

一筋も枝なき柳哉　（新五子）

君行くや柳絲に道長し　（新五子）

一軒の茶店の柳老いにけり　（新五子）

花のあか物いとぬ雨の柳哉　（書牘ヨリ）

柏木のいろの葉見するや遅櫻の

十二俳仙圖

花散り月落ちて文斯にあり難や　（無村文集）

雨日嵐山

筏士の蓑や嵐の花衣

風入馬蹄軽

木の下か蹄の風や散る櫻

海手より日ハ照りつけて山櫻

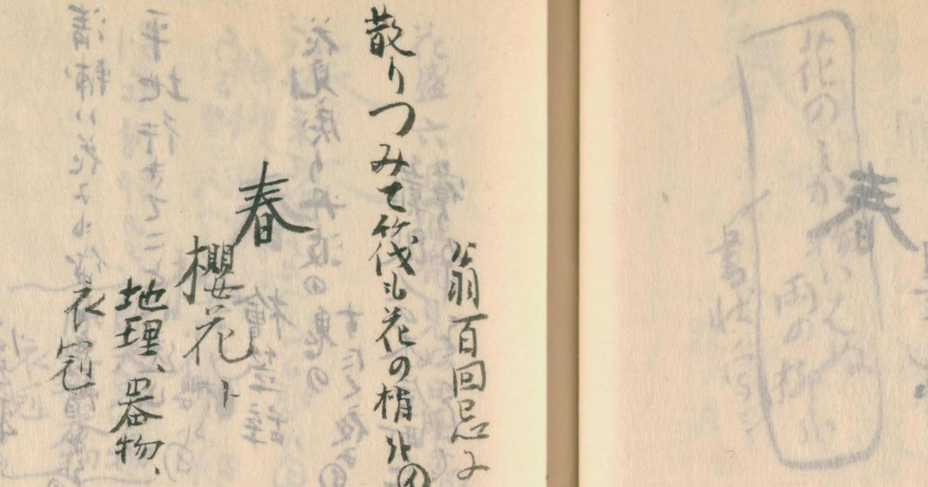
驟雨の松に吹かれて山櫻

糸櫻賛

行〻て雨ある宿や糸櫻　（蕪村）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

蕪村



春

送別　門口の櫻を雲のたゞめかな（新五子）

鳥飢て花踏みこぼす山櫻（新五子）

鶯のたま〳〵啼や雨の山

人間よ鶯なくや山ざくら

奈良道や當麻詣の花一木

曉臺が伏見落成に趣くを送て

夜桃林をいでゝ曉渡峨の櫻人

櫻散て刺ある草の見ゆるかな

一のを出る日や雨風はげしくて（蕪村文集）

雲を呑て花を吐なるよしの山（新五子）

祇や鑓や花よ香炬ん草むしろ

馬下りて高根の櫻見附たり

翁百回忌

散りつみて筏も花の椙ばしら

石高な都よ花の戻り足（新題林　新五子）

ねふたさの春は御室の花ざかり

暮なんとす春を小塩の山櫻（蕪村文集）

花の御能過ぎて夜を行く浪花人

嵯峨一日閑院様の櫻哉

花の香や嵯峨のともし火消る時

嵐山を出る嵯峨へ帰る人

いづくの花に暮しけん

三芳野の近道寒し山櫻

みよしのゝ花盗人のかゝる

銭買ふて入る門や櫻に近し

花に遠き櫻に近し芳野川

蕪村

蕪村　淋しさに花さきめのり山ざくらの
身にさらにちりかゝる花や　下り坂の
玉川に高野の花や流れ去る
きのふけふ高ねの櫻見えたる（新五子）
鳥帽子脱て外をみる
花に暮れて我家遠き野道かな
花ごろもぬぎ捨る我住家
孤の書院かな（新五子）
清輔が花みる僧を鳥帽子哉
花の幕兼好を覗く女あり
平地行きてことに遠山櫻哉
花散るや重たき笈のうしろより
檜笠辞
花見戻り丹波の鬼のすたく夜な
花散りて身のうき夜嵐く花の戻りかな
阿古久曽の下闇や檜笠（花櫻帖　蕪村文集）
難波人の木屋町に宿りをとゝて
花を踏み草履も見えて朝寐かな
花盛六波羅雑売見ぬ日無き

春

櫻花

（陳天文類　陳地理器物　衣冠）

旅人の臭また寒し　初櫻
傾城の後の世かけて花見哉（蕪村集）
花に舞ひて帰るさ憎し　白拍子（蕪村集）
剛力はたゞに見過ぎぬ山櫻
山寺の冷食寒き櫻かな（新題林）
衹や鑓や髭に落花を拾りけり
花守の身は弓矢なき栞かな（新五子）
高野
隠れ住て花に真田か謡かな
足弱の宿ともたのめ遅櫻（新五子）
風声のをり居の君や遅櫻（新五子）
蕪村
かり寐するいとまを花の夫婦

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

陰口塚序

一片花飛減却春　櫻狩美人の腹也減却す（蕪村文集）

やごとなき唐方のかざりおろさるゝにて、かゝる林き地に住みおるゝの如

小冠者出て花見る人を咎めけり

花散りて木の間の寺の成ゆくも見ゆ

別荘僧都の花ともなる

ちる櫻子規の聲の嘘にも散りてやまざたり　山櫻（新題林）

花に来て花なき枝を見ゆる哉　夕べ（蕪村句集）

花ざかり腸に近き手枕の夢　かさゝ櫻のうつゝ

櫻のと木春に背くるけもの哉

花の主　夕べ（蕪村文集）

花散りて木の間の寺の成ゆくも見ゆ　櫻狩美人の腹也減却す（蕪村文集）

やごとなき唐方のかざりおろさるゝにて、かゝる林き地に住みおるゝの如

小冠者出て花見る人を咎めけり

花散りて木の間の寺の成ゆくも見ゆ　山櫻（下）

別荘僧都の花ともなる

ちる櫻子規の聲の嘘にも散りてやまざたり　山櫻（新題林）

花に来て花なき枝を見ゆる哉　夕べ（蕪村句集）

花ざかり腸に近き手枕の夢　かさゝ櫻のうつゝ

櫻のと木春に背くるけもの哉

春木

梅柳椿櫻陳

蕪村

大原やつゝじか中にくらたてる

垣越ものお佐代の接木かな

菜畠にまいる忘るゝ接木かな

つゝじ咲て汁も実もなき飯白し

山吹を見へ出てうれしつゝじ哉

つゝじ咲て石移したる木陰よし

岩つゝじ赤き花のつゝじ哉

つゝじあやふき石工の指ふりたる

利休の花月に書む女あり

かものうねにもこゝろ残む女あり

梨の花

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

高人を吠る犬あり柳の花　（蕪村）

くらを捨て牛になるなり柳の花

なか〳〵に寝たさまもよし柳の宿

桜より桃よりうれしさよ（新五子）

文へ折て白桃うつす柳かな

雨の日や都に遠き桃の宿（新五子）

桃の花ちるや住口吉て後

海棠や白粉を紅をあやまりて

江碧鳥愈白
山青花欲燃
大文字や数間の
つし燃んとす
（此句八三本木の水楼に上り東山の絶景に
對して云々
書状の内）

菜の花や畫一ー きり上海の音

菜の花や油をしぼる小家かちの

春景

菜の花や月は東にはハ西に（蕪村）

菜の花や鯨もよらず海暮れぬ

菜の花や見ゆる限り風呂敷（蕪村）

菜の花や摩耶を下れば日のくるゝ

菜の花や油をしぼる小家かちの

菜の花や月は東にはハ西に（蕪村）

菜の花や鯨もよらず海暮れぬ

菜の花や見ゆる限り風呂敷（蕪村）

菜の花や河内へ小商い（新五子）

菜の花に僧の脚半のさがりけり（新題林　新五子）

菜の花に皆出てゐたらひしの（新五子）

菜の花や遠山鳥の尾上まで

居りたる舟を上れば菫哉

骨拾ふ人に一ー たゝきすみれ草

春

花草

朝日さす弓師が店や福寿草

蕪村

琴心桃美人

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

能因帯刀の事思いいて、

山吹や井手を流るゝ鉋屑

山寺に来ふむ音や藤の花

うつむけば春うちあけて藤の花

人なき日藤に培ふ法師かな

藤の花あやしき夫婦休みけり（新五子）

月に遠く覚ゆる藤の色香かな（新五子）

紫の戸にあけくれかゝる白雲を
いつ紫の雲に見なさん

法然の珠数かけかゝる希松の藤（玉車条）

短夜や思のよらぬ

春草（陳花草）

蒼とはなれも知らずよ路の草

七草や砕の紐の片結び

古道にけぶり見て置根芹かな（新五子）

乱れきりに往尽きこゝろ芹の中

古寺やはうろく捨る芹の中（俳立子）

暁の雨やすくろの薄原

裏門の寺に逢着すおのざれ

折もてる巌触れて暮遅し ㋑

藪野やいさ物焚んて枯つゞく（蕪村句集）

苗代や鞍馬の櫻散りにけり

苗代にうれしき魚の行へ哉（新五子）

櫻ちる苗代水や星月夜 ㋑

草の戸や二見の若和布もらひ来（新五子）

吉野出て又めつらしや三月菜（新百題）

諸ともわらのみさきの隣松院
今年翁を探て偶来そをはゞ梨
余不堪感慨一首
孫萬里今なをいつちにありや
おもかげの春色ほゝめきて
来ませす玉琢ん君かを捨を学
放ふ笹うらすゝき我ゆるされく翁
七書附
右蕪村の偽筆三ツ見タルモノ
下ニ多画下り人四五人ヲ画ク

短夜や思のもよらぬ夢の告 ㋑

夏短夜

東北の人を大津の駅に送る

老犬

雲裡房に指さす芥子

蕪村

短夜や浅瀬にのこる月一片 ㋑

短夜や伏見の扉淀の出

短夜や芦間流るゝ鷺の泡

短夜や四心象の川手水

短夜や浪おち隣の於篇

短夜や小さん世のけたる灯を見

短夜や一つあまりて古賀の松

短夜を眠らて守るや翁丸

短夜や枕もとなき銀屏風

短夜や枕もとなき男の子

短夜や更たらぬ夢の名残の玉

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　ガラス使用

短夜や金も蔵さぬ狐つき

渓流吟行

終夜三本木の水揚る宵して

短夜や音妻の人のさが浪

短夜や浅井に柳の花を汲む

短夜や八ツ棟山の狐どもの

短夜や八ツ棟山の狐どもの

短夜や白拍子（蕪村）

短夜や二尺あまりの大井川

短夜の闇より（明けて）大井川（雫袋）

短夜や芒生ひそふ垣のひま（新五子）

短夜の闇より（明けて）大井川（新五子）

短夜の闇より（明けて）大井川（雫袋

蕪村

病人の髭の蜘追ふ暑さ哉（新五子）

更衣布子の隠の重さかな

更衣昔に遠きやみ上り（新五子）

更衣釜霞輪の鞆たのん（新五子）

御手討の夫婦なりしを衣がへ

痩臑の毛に微風あり衣がへ

絹着せぬ家中ゆるき衣がへ

辻駕に善き人載せつ衣がへ

大兵の廿ヶ人あまり衣がへ

衣がへ印誰買ひよ所化二人

衣がへ野路の人をつかみ白し

衣がへいやしからざるはした銭

ものくるゝ人来まーり衣がへ

二十五の暁起や衣がへ

蕪村

夏四月人事の更衣

裕

衣かへ人も五尺のからだかな

北窓を

衣がへ

衣がへ

衣がへ

衣かへ母なん藤原氏なりける（新花摘）

たのもしき矢数の袴小

（矢数の袴かな）

（矢数の日、袴着たる女子を見て）

橘のかこと（ごとし）ま一き袴かな

小原女の五人揃ふて袷かな（新花摘）

那須七騎弓矢に進ふ衣更（新五子）

ゆきたけもきしそ流人の袷小（新五子）

袷着て身ハ世にありのすさみ小（新五子）

衣かへ塵打拂ふ朱の盤（更衣狂女の眉毛いつけなき）

更衣一渡（一渡）り哉（更衣（新五子））

更衣いつ弟なき身の田出かな

更衣うしと見し世も忘れ貝

夏

四月人事（陰更衣袷）

草の雨　祭（葵一新五子）の車　過ぎてのち

灌佛ハ裸を去めすたゝめ小（新五子）

灌佛やもとより　膜ハかりのやど（新花摘）

卯月八日　死んで生まるゝ佛（新花摘）

大佛のこゝろかなら〳〵八日小（新五子）

大矢数　弓師　親子も参りたる（新花摘）

ほの〳〵と粥に明け　行く矢数小（新花摘）

少年の矢数　問ひよる　念者ぶり（新花摘）

練供養　参り　顔なる　小家小（新花摘）

酒を煮る家の女房ちよと伊れた（新花摘）

見わたせば麦生よ田植時の

夏

五月人事

たくびなり席かきよせて別れたる身を踏込んで田植哉（新五子）

鯰汲て戻る田植の男かな（蕪村句集）（新花摘）

雨ほろ〳〵曽我中村の田植哉（新五子）

今日ばかりの伯母もあれつゝ田植哉（新花摘）

泊りかけの伯母もあれつゝ田植哉（新花摘）

三河なる八橋ゆかし杜若（新花摘）

午の貝田唄音なくなりぬるみ（新花摘）

獺を打し翁も誘ふ田植哉（新花摘）

さをとめやつゝの小橋ハさしで来し（新花摘）

射干（ひあふぎ）して啼くや近江やゝ（新花摘）

雨やそも葉ごもり火串に白き花見ゆ（新花摘）
いか宿に物忘れ来て照射哉
谷風に付木吹きちる火串かな（新花摘）
兄弟のさつを中よき火串かな（新花摘）
宿近く火串もふけぬ雨のひま（新花摘）
葉を焦ちて火串に蛭の焦る音（新花摘）
鵜舟ゆく水富むれば照射哉
木隠れて名参の家の懐かしな（新花摘）
家古りて慌見せたる翠微かな（新花摘）
浪花の一本亭に訪ひて
粽解いて菰廬吹く風の音

夏

六月人事

川狩
御祓
飲食

鴨河を渉ぶ

川狩や顛吉来ると云ふ聲す
川狩や樓上の人の見下す顔
雨後の月誰をや夜ふりの腔白き
月に對す君に投網の水煙
灸のない背中ながすや夏祓（蕪村句集）
出水の加茂みたらしの橋や夏祓
夕顔に秋をよぐ風そよぐ祓川
つくづくと禊宮で事すむ御祓かな
木葉の佛流す淨祓川

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

愚痴無智の甘酒つくる杉か岡
甘酒の地獄も近し箱根山
御佛に畫をなへそよ一夜酒
心太さかしまによし銀河三千尺（蕪村句集）
宗鑑に蔦水たまふ大原山
自画賛 蔦水みそらでうれし老の顔（新五子）
翁賛 蔦水や鏡に息のかゝる時（蕪村文集）
仝 蔦水に見る影もなき翁かな（蕪村文集）
水の影のきのふにつゞく暑さ哉
水の影やあるじはひとり後家の君
蔦水や入江の佛所よ話つれ（新五子）

夏六月人事

（陣川狩御供、飲食）

加茂の西岸に楊を下して

涼舟舳をたゝすべき網打の見えずなり行く涼みかな
丈山の口が過たり多淑き
床涼し笠着連歌のまゝ（蕪村句集）

蔦園が魂をねく

川床に憚き法師の立居かな
川床や蓮のうらより便りおもたぐ
花頂山に会して探題
褒居士は堅い親父よ竹婦人
弓取の帯の細さよ蚤一
細脛に夕風さはる蚤一
天あらばしぐれ蓑のかごや
雨乞の日雲る国守の涙かな
大粒な雨は祈りの奇特かな
竹婦人㊁

若狭宮のすかくしさよ　夏神樂（新五子）

いさゝかな料理出来たり　扇千（句）

鬼の三味しく閻王に勘当されて夕涼　蕪村翁の自画賛ヲ見タリトアル人ノ話シ

朧あー　き僧こぼし行く施米ル

裸身ヨ神うらまセ夏神樂

出干や甥のうしろ姿の僧とふ東大寺

掛香や亡れ顔なる袖だゝみ

掛香や唖の娘の人となり

掛香や立ちまよふ蝉の衣（蕪村句集）

葉櫻の下蔭たどる田草取（新花摘）

祇園会や真昼の鉾が真の風薫る（蕪村句集）

祇園会や僧の訪ひよる椎がもと

殿原ハ細工めさるや夕涼（新五子）

夏人事ノ内

蚊帳
蚊遣

僧とあてうれし蚊帳を高く釣（新五子）

尼寺や善き蚊帳無き草の戸に善き蚊帳無き法師ル（新花摘）

あら涼ー　裾吹く蚊帳も根なし草

顔白きうれしさよ　枕蚊帳（新花摘）

蚊帳を出て内に居ぬ身の夜明ケ

新たに居を卜したる釣蕗蚊帳にさはらぬ住居ル

諸子比枝の僧房に會す余も又つきのために此行にもれぬ

蚊帳つりそめて翠微つくらん窓の内

蚊帳の中にたほろ月夜の内待ル

腹あーき陸同士の蚊遣ル（新選）
垣こえて墓のさけ行く蚊遣ル
嵯峨三軒家大阪人の蚊遣ル
戸をあけて蚊遣に茶の夫燃え立て息恥かーき蚊遣ル（新五子）
柴の戸す（の）る（の）几の上の牧遣ル（新五子）
いさゝらい蚊遣のうしろ虎渓まで（の）一日のけふも蚊遣ル（新五子）
いとまなき身をくるしかる蚊遣かな（の）谷ーて蚊遣にも遠き主ル（新五子）
雨にもゆる鵜飼が宿の蚊遣ル（の）蚊遣ーて蚊遣ーて蚊遣ーて叙らす僧の座右ル（新五子）
蚊遣ーや草の月（新五子）
蚊遣火や紫門多く相似たり（新五子）

夏人事
扇
團扇
鵜飼

恋わたる鎌倉武士の扇ル（の）
とかくーて笠になーつる扇ル
渡ーー呼ぶ草のあなたの扇ル
団にうれーー恋君が扇真白なる（の）（新五子）
古扇二本さーたるも下部ル（新五子）
雁岩久ーくたとうれせさうれバ（無村句集）
有と見えて扇の裏繪覚束な
主人あるじあふぐ扇ル酒宴哉
繪團扇のうれも清十郎にた夏ル
手すさびの團扇かく草の汁（蕪村句集）
褌に團扇さーたる亭主ル（新選）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

任口に白き團を
おもち女(ノ)

突きさして團扇忘るゝ俤ぶ（新五子）
木刀も沽へき猛(ママ)の團扇ぶ（新五子）
後家の君たそかれ頬の團ぶ（ノ）
仮の家の塵を掃取團ぶ（ノ）
老なりし鶺飼今年ぶ見えぬぶ
殿ばらの名古屋息なる鶺川ぶ（無村句集 新花つゝ）
朝風の吹きさおろす鶺川ぶ（新五子）
見失ふ鶺の出處や白昼の光（新五子）
春泥舎會東寺山吹にてありけり（新五子）
誰住んで楼流ゝ鶺川ぶ
夜やいつの長柄の鶺舟曾て見し（ノ）

三夏人寄ノ内
夏籠
鮓

秋一て拂ふ夏書の机ぶ（新花摘）
夏百日墨もゆのめぬ心ぶ
日をもつて數ふる筆の夏書ぶ（新五子）
味噌汁を煮ぬ娘の夏書ぶ（新五子）（新選）（新五子）
夢さめてあはやと開く一夜鮓（ノ）
なれ過ぎた鮓をあるじの遺恨
鮓つけて誰待つともなき身ぶ（新五子）
鮓桶を己れ〳〵と樹下にぶ（ノ）
蔕多の葉を此君と申也崔鮓
鮓鮓や亮根の城みゆる雲かゝる（蕪村句集 新花つゝ）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

鮓つけてやうで去こたる魚屋ぶ（新花つ）
寂莫と書間を鮓のなれかな（新花つ）
鮓の石に五更の鐘のひびきぶ（新花つ）
鮓桶を洗へば浅き遊魚ぶ（新花つみ）
鮓をおす我し酒醸す隣あり（新花つみ）
鮓をおす石上に詩を題すべく（新花つみ）
鮓桶を洗へば浅き遊魚ぶ（新花つみ）
真一ぢやの鮓に月寒し観魚亭（新花つみ）
卓上の鮓に日切る主人かな（イ）
木の札とに鮓の口切る主人かな（イ）

夏

五月雨上

五月雨のうち柱や老の耳（イ）
五月雨の大井こえたるかこさよ（蕪村句集 新花摘）
五月雨や大河を前に家二軒
五月雨や佛の花を捨てゐ出る
五月雨や田面の蛍となりゆく（蕪村句集 新花つ）
五月雨や田面の蛍水に入る（新五子）
五月雨のかくて蛍の小道ぶ（新花つ）
五月雨に見えぬ蛍の小道ぶ（新花つ）
五月雨や鳥羽の小道を人の行く（新花つみ）
五月雨や淀海をつくく濁り水（新花つみ）
五月雨や水に銭ふむ泥一舟（新花つ）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用